書　評

David Wallace
Strong Women: Life, Text, and Territory 1347-1645.
Oxford: Oxford University Press, 2011. xxxi+288pp.

本書は著者が2007年10月にオックスフォード大学で行ったClarendon Lectureを基に形成されたものである。中世から初期近代の女性４人の「記録された人生」“*life*”（xix）に焦点を当てた研究書である。全４章から成り，第１章でDorothea of Montau（1347-1394），第２章でMargery Kempe of Lynn（c.1373-c.1440），第３章でMary Ward of Yorkshire（1585-1645），第４章でElizabeth Cary of Drury Lane（c.1585-1639）を取り上げる。現存するテキストを読み解きながらこの４人の人生を考察する。サブタイトルが示すように，その人生（life）は生地や訪れた国・活動した場所との関係性を含めて語られる。残されたテキスト（text）だけでなく領土（territory）をキーワードに女性の数奇な人生を語ることが本書の特徴である。

本書で語られる４人は階級も出身地も様々であるが，その共通点はカトリック信者としての強き女性“*mulier fortis*”（xix）である。それは現世の権威よりも聖なる神に従う宗教的な強さであり，時として司祭さらには教皇庁といった宗教権威にさえも立ち向かう強さである。当時の敬虔なカトリック信者，特に女性信者にとって最上位の宗教生活は「隠修生活」“enclosure”とされていた（157）。著者はこの“enclosure”をキーワードに，権威に迎合することなく自らが信じる宗教生活を突き進んだ女性達の強さを，そしてその強さ故に書物という形で残ることになった彼女達の“*life*”を詳細な読みで時代順に紐解く。４人の女性の人生を語る書物は伝記が中心であるがその執筆者は様々で，女性の死後に男性司祭が執筆，本人の口述筆記による自伝，主に女性支持者が死後に執筆，娘達が死後に執筆というように，三者三様ならぬ四者四様である。

本書では第１章から第４章まで４人の女性がリレー式に結びつけられていく。Dorothea of MontauとMargery KempeはDanzig（オランダ語名Dansk，現ポーランドのGdansk）という領土で結びつけられる。Danzigはチュートン騎士団（Teutonic Order）の重要な領土である。Dortheaにとっては結婚後に暮らした町であり，Kempeにとっては啓示を受けて敢行した巡礼の目的地である。二人の活動の背後にはチュートン騎士団による宗教活動および交易活動が存在する。Margery KempeとMary Wardの共通項は，既存の宗教権威ではなく，神との対話による自らの心の声に従って旅に出たことであり，危険な旅の中で事実上の司祭の役割を果たしたことである。また，

Mary Ward と Elizabeth Cary は上流階級出身でロンドンのカトリック地区がその人生で重要な役割を果たす。そして４人に共通するのはその不休の活動である。一見するとつながりがない人選に見えるが，適宜に共通点が提示されて全体に統一感がもたらされている。

著者は伝記的資料を丹念に読み解くだけでなく，それらの原稿を初めとする資料発見の経緯，編集の歴史についても解説し，女性達の背後にある権威機関との関係やヨーロッパの歴史的経済的背景なども詳細に解説する。これはひとえに著者の膨大な資料の分析によってなせる業である。しかし同時に背景知識に精通していない読者には読みづらい部分もある。例えば1つの地名に３つの呼び名 Danzig，Dansk，Gdansk が混在，人物名と地名が同一名称，１人の人物に数種類の呼び名などは大変わかりにくい。統一した呼び名の使用または本文中の括弧内注記など，読者目線の対応が欲しいところである。

第１章“Borderline Sanctity: Dorothea of Montau, 1347–1394”では，プロイセン出身の女性 Dorothea of Montau について，彼女の聴罪司祭 Johaness von Marienwerder（John of Marienwerder）が執筆した *Das Leben* の分析を中心に語られる。Dorothea はアーヘン巡礼からの帰路で心臓を入れ替える幻視を経験する。そして1389年に単独でローマ巡礼を決行するが，Danzig 帰郷後の1391年に神の言葉に従って Marienwerder へ移り，1393年に司祭 Marienwerder の修道院で厳しい隠修生活“enclosure”に入る。１年余り後に亡くなるが，Dorothea を崇拝する巡礼者達が Marienwerder に殺到する。Dorothea 自身は平民出身で読み書きができなかったが，プロイセン初の隠修女性（anchoress）として死後に司祭 Marienwerder によって伝記 *Das Leben* が執筆される。司祭 Marienwerder は騎士修道会のチュートン騎士団（Teutonic Order）の一員であることから，著者は Dorothea の神を求める危険を顧みない不休の活動（つまり巡礼）およびその後の隠修生活と，チュートン騎士団の宗教的かつ領土的な活動との結び付きについて探っていく。さらにその死後についても，死亡時の Dorothea の足が東を向いていたことは東へと行進するチュートン騎士団との結束を象徴するのではないかと主張し，司祭 Marienwerder は彼女を“the praiseworthy martyr Dorothea”と称して殉教者の扱いをしたと指摘する（26–27）。そして Dorothea のあくなき神への追求（欲望）から宗教と資本市場の類似性を導き出して，最終的にチュートン騎士団の開拓・布教・貿易活動と結び付ける（30–33）。このように司祭 Marienwerder の筆による Dorothea 賛美と彼の Dorothea 列聖運動の背後に，チュートン騎士団の宗教・領土拡

大計画があることを類似性や象徴性を示しながら解説する。

著者はさらに20世紀以降のDorothea崇拝に目を向け，1976年のローマ教皇による列聖に関する考察も行う（44-52）。1930年代ヒトラーの時代に列聖運動が復活したこと，第三帝国が授けた最高の勲章がTeutonic Orderという名の勲章であること，かつてナチス親衛隊所属だったギュンター・グラスが1977年出版の*Dar Butt*（*The Flounder*）でDorotheaを扱っていること，ナチスドイツ下で動員兵士経験があるラツィンガー枢機卿（前ローマ教皇ベネディクト16世）が1979年にDorotheaを祝う説教を行ったことなど，Dorothea列聖による宗教と戦争の結びつきの証左は説得力がある。そして章の最終部で著者は司祭MarienwerderとDorotheaの出会いをアメリゴ・ベスプッチと新大陸アメリカに見立て，Dorotheaの人生における男性支配（*domination masculine*）の構図を示す（56-57）。夫，聴罪司祭，その他の庇護者，検査官など，彼女の周囲は男性で占められている。「Dorotheaが完璧なまでに男性支配（*domination masculine*）の論理を実現するがゆえにその論理を破壊に導く，ということはあり得るだろうか」と著者はジェンダー的視点を持って疑問を呈する（60）。実際にDorotheaの“*life*”を作成したのは男性司祭である。彼なくしてはDorotheaが語られることもなく，列聖運動もなかったであろう。ただし，巡礼もその後Marienwerderへ向かい隠修生活に入ったのもすべてDorotheaの意志によるもので，著者が本書で語るとおりそれはDorothea自身の“*life*”と言ってよいだろう。

第2章“Anchoritic Damsel: Margery Kempe of Lynn, c. 1373- c. 1440”では，1930年代にイギリス版ジャンヌ・ダルクともてはやされたMargery Kempeの“*life*”が取り上げられる。彼女の*The Book of Margery Kempe*は英語で執筆されたイギリス最古の散文体伝記である。Kempeの父親はLynn（King's Lynn）の市長を数回勤めた人物である。本書はKempeの人生を語る前に，まず*The Book of Margery Kempe*の原稿発見の話から始める。古くから執筆作業は男性の仕事とみなされる中，女性に関する文献や女性が書いた文献の多くは時代と共に忘れ去られる場合がほとんどである。Kempeの原稿は女性研究者Hope Emily Allenの手によって1934年にその詳細が明らかとなる。Kempeの出現は1920年に列聖されたフランスのジャンヌ・ダルクに対抗できる人物“a very national saint”として英国内で歓迎され，原稿がラテン語ではなく英語で書かれていることから「“foreign influence”に毒されず（77）」「“Englishness”を力強く表現している（71）」と賞賛された。しかしAllenはその後第二次世界大戦も相まって，編集出版作業つまり原稿に関

する功績を共同研究者だった男性に奪われる。つまり，原稿発見によってKempeの“*life*”が回復する一方で，その功労者である女性研究者Allenの“*life*”は奪われるのである。本書でその事実を記すことは女性研究者Allenの“*life*”を取り戻す作業でもある。一見すると不要と思われるエピソードだが，実は女性が自分の“*life*”を残す困難さを象徴する出来事の先触れとして，まず原稿にまつわる女性研究者の“*life*”を描写し，本来のテーマであるMargery Kempeの宗教活動つまり彼女の困難に満ちた“*life*”を分析する手法は大変巧みである。

The Book of Margery Kempe はBook IとBook IIの構成で，Book Iは1414年のエルサレム巡礼が中心，Book IIは孫娘のいるDansk（Danzig, Gdansk）への旅について書かれている。本書では特に後半のBook IIに焦点が当てられ，そのロマンス的描写とイングランドおよびDansk（Danzig）に根付く騎士道精神を結び付ける。Kempeの旅の特異性はDansk（Danzig）行きが聴罪司祭などの宗教指導者に無断の旅だったことであり，それは「頭の中のイエスがその外にいる神父たる聴罪司祭に勝った（90）」ためとされる。Dorothea of Montauと同様に既存の宗教権威よりも神との直接対話から得た直観を重んじる様が描かれている。Dansk（Danzig）への船旅では嵐に遭うが，Book IIでは荒海上の船に教会のイメージが重ねられていると著者は指摘する。そしてそのイメージから著者は，「生死の境界線上にある“suspended between life and death”」船上は，隠修生活を送る修道女達（anchoresses）の住む空間であると主張する（91）。また，船上で直接神に祈りを捧げたことによりKempeが事実上の司祭の役割を担ったと述べる（92）。

第1章同様にチュートン騎士団との関係について考察する“Margery in Dansk”と名付けた項には，第2章最大の22ページが割かれている（94–115）。本項はチュートン騎士団の建造物や彫像に焦点を当て，この街に息づく騎士道精神を解説しながらイングランドやKempeの出身地Lynnとの関係を探る。例えば，Dansk（Danzig）のギルドである聖ジョージ兄弟団の礼拝堂に飾られた聖ジョージと竜のレリーフを基に，聖ジョージがイングランドの守護聖人であること，聖ジョージが竜から救った乙女がマーガレットであることを示し，マーガレット崇拝が盛んなLynnとの関連性を指摘する。また，聖ジョージはチュートン騎士団の守護者でもあると述べて，Dansk（Danzig）–チュートン騎士団–Lynn–Margery Kempeの一連の流れを示す（107–108）。しかし間接的例証を豊富に提示する一方で，Kempeとの直接的関わりを示す記述はほとんどない。著者の精力的な資料分析にも拘わらず間接的例証が列挙されるため，本書の意図に反して肝心のMargery

Kempe の“*life*”の影が薄く感じられるところが残念である。

その後の項では Dansk（Danzig）から帰郷後の Kempe による自分自身のテキスト作りへと話が進められる（122–32）。Kempe は読み書きができなかったため宗教知識を持った男性の助けを借りた口述筆記でテキスト作成が行われた。著者は，*The Book of Margery Kempe* に表出される宗教的かつロマンス的要素はイングランドの騎士道精神に由来すると指摘する。そして平民出身で修道女ではない Kempe が英国初の自伝を作成する経緯について当時の出版背景から推測する。それによるとロマンスの系譜にある1430年代の毛皮商達によるロンドン年代記作成が影響している。Kempe の義理の父親が毛皮商だったことを考えると大変興味深い説である。Kempe が既存の宗教権威に従わずに旅に出て，自ら信じる最高の宗教生活を手に入れようと奮闘したことは強き女性“*mulier fortis*”の証であり，それを自伝として残したことは Kempe 最大の特徴だろう。Kempe の性格的な面を挙げて批判的に論ずる批評が少なくない中で（Lucas 294–95），本書の Kempe 論は客観的に語られており読むに値するものである。

第 3 章は “Holy Amazon: Mary Ward of Yorkshire, 1585–1645”である。Mary Ward は Yorkshire 出身で1609年に The Institute of the Blessed Virgin Mary（通称 Sisters of Loreto ロレート修道会）を設立し，2009年12月にローマ教皇ベネディクト16世から‘Venerable’（列聖のための 3 段階中の第 1 段階）の称号を与えられた女性である。女性を閉じ込める隠修生活“enclosure”を拒否し，女性の主体的宗教活動を主張し，教皇および教皇庁から迫害を受けながらも女子教育と女性による使徒的活動を推進した女性である。彼女が設立した女子修道会は現在も世界各地で存続している。Mary Ward の人生を記す文献は，妹が執筆した記録（1619–24執筆），パリの仲間による *English Life*（1645–50 頃執筆），弟子 Mary Poyntz による *Italian Life*，Mary Ward 自身の自伝的記録や手紙，Mary Poyntz 監修の50枚の連作油絵 *The Painted Life* である。2007年までこれらすべての文献は非公開でミュンヘンのニンフェンブルク宮殿に保管され，2008年に 5 巻本で出版されて彼女の“*life*”が明らかになった（135–36）。2008年に公開された理由に本書は触れていないが，教皇庁が Ward に Venerable の称号を授与した2009年は The Institute 設立400周年であり，それに合わせた文献公開だったと考えられる。Ward は Dorothea of Montau や Margery Kempe と違いジェントリ出身で，イタリア語，ラテン語に堪能で修辞法や詩作の教養も身につけていた。また活動内容も先の二人は個別の活動が中心であったが，Ward は女性教育に力を入れ，生涯にわたって弟子や支持者との女性同士の

絆を体現した。

本章においてWardの人生は*English Life*を中心に語られる。その執筆様式は冒頭からロマンスと聖人伝の中間の描写であると著者は指摘する(151)。*Italian Life*も含めてWardの伝記は彼女を崇拝する支持者や弟子が執筆している。イングランド伝統の読み物として武勇伝を伝えるロマンス(騎士道物語)的描写と，崇拝するWardを聖人として描写する試みが融合するのは極めて自然なことである。

1609年にWardはロンドン中心部のカトリック地区The Strandで彼女の人生を大きく変えることになる啓示を受け，所属していた英国クララ会を去る決心をする。これはMargery Kempeと同じくイエズス会の聴罪司祭と神(啓示)という2つの父権の間の選択であり，最終的にはKempe同様に神の意志を選択する(162)。そしてロンドンを離れ，フランスのSt-OmerでThe Instituteを設立する。本書はThe Instituteの活動を通して，Wardが女性ゆえにイエズス会および教皇庁から圧力をかけられる様を詳細に記して，当時の宗教界における女性蔑視の実態を明らかにする。彼女が設立した会は聖イグナティウス・ロヨラが設立したThe Society of Jesus(イエズス会)をモデルにした女子修道会，つまり女性版イエズス会だったが，会の名にJesusを用いることにイエズス会が反対する。さらに貧民達に信仰を説く活動について女性は説教する立場にないと批判される(164)。これらの批判は当時の宗教界における男性の独占的支配を示す。WardはThe Instituteの活動を認めてもらう目的で1621年にローマ巡礼を遂行し，ローマ教皇に謁見して演説を行うものの，結局1624年に教皇派はThe Instituteの閉鎖命令を出し，1631年にWardは逮捕されて隠修生活“enclosure”へ追い込まれる(166-83)。著者はこの一連の動きについて支持者や弟子などWard側が残した記録だけでなく教皇側の手紙や記録を引用することによって，事実関係をできる限り正確に分析しようと努めている。最初のローマ巡礼時のローマ教皇グレゴリウス15世が当初からWard達を快く思っていなかったことや，Wardが信頼を寄せていた教皇ウルバヌス8世が弾圧に積極的だったことが聖職関係者の手紙や資料から判明する(179)。著者はこの点について，教皇庁の階層制を無視して教皇に面会できれば万事うまくいくと考えていたWardの甘さを指摘し，聖職界における女性蔑視と教皇庁内の宗教政治力学に対する認識をWardが持ち合わせなかったことを明らかにしている。これにより，Wardが偏見に負けない強き女性“*mulier fortis*”であるとともに，感情に訴えることで道が開けると信じるナイーブな女性だったことが推測できるだろう。

第3章の最終項では，教皇や教皇庁の弾圧に屈することなく，縮小しながらもThe Instituteを守り抜いた

Ward の性格や能力についての考察がなされている（191-200）。それぞれの伝記に描かれた Ward の姿から導き出される大きな能力は聞く力で，それゆえ多くの弟子や信奉者を集めたと著者は分析する。さらに Ward と前章の Margery Kempe を比較し，Ward と Kempe は旅の苦難を乗り越えて隠修生活の厳しさと旅を結び付けたと述べる。その一方で弟子に恵まれた Ward と違い，Kempe には他人の言葉に耳を傾ける特性はなく，教会を空にするほどに絶叫することで信仰心を表したために弟子がいなかったと主張する（193）しかし弟子や信奉者の有無は性格だけでなく，出身階級と無縁ではないだろう。Kempe は市民階級出身で，Ward は上流階級のジェントリ出身である。Kempe は市民階級の規範を無視したために上流階級よりもむしろ同階級の人々から批判を受けることが多かった（Lucas 296-303）。弟子の有無に関して単純な性格問題ではなく階級問題を含めた考察があれば，より重層的な論となっただろう。

本章の最後で著者は，それまで無視されてきた女性の言葉が Mary Ward の存在によって保存され，女性同士のネットワークへと広がり，今では女性のテキストの聖典に加えられていると言って締めくくる（200）。Ward の伝記を作成したのは Ward が教育した女性達で，圧力を受けながら 4 世紀に渡ってその活動を続けてきたのは彼女たちの後継者である。Ward が St-Omer で女性達にしたスピーチの一節が，脈々と受け継がれるその精神－神の真理の下での男女平等精神を伝える。“[T]he verity of our Lorde remaneth forever. It is not veritas hominum, verity of men, nor veritie of weomen, but veritas Domini, and this veritie wemen may have, as well as men. If we fayle, it is for want of this verity and not because we are weomen”（138）。

第 4 章“Vice Queen of Ireland: Elizabeth Cary of Drury Lane, c. 1585-1639”では，おそらく 4 人の中では最も文学研究が行われている Elizabeth Cary が取り上げられる。まず本章見出しの Elizabeth Cary of Drury Lane であるが，この呼び名で Cary が呼ばれることはほとんどない。実家 Tanfield 家も嫁ぎ先の Cary 家もともにプロテスタントのジェントリだが，夫 Henry は1599年にナイト爵を授けられ，1620年にフォークランド子爵（Viscount Falkland）に叙せられている。そのため Elizabeth Cary も Lady Falkland または Viscountess Falkland の称号を付けて呼ばれることが多い。本章で著者が Cary の場所として選択した Drury Lane はロンドン在住のカトリックの中心地で，Mary Ward が啓示を受けた The Strand と交わる通りである。Cary は1626年のカトリック改宗後から亡くなるまで主にこの地で活動した。本書のテーマはカトリック信者としての強き

女性“*mulier fortis*”であるが，改宗後のCaryが夫の援助を受けずに活動したことを考えると，夫への付随を表す従来の称号ではなくDrury Laneという地名を付すことは理にかなう。Caryは室内劇*The Tragedy of Mariam, the Fair Queen of Jewry*（1613）と，*History of the Life, Reign, and the Death of Edward II*（w. 1626–28）を執筆しており，それらの作品に関する研究は多い。本書では娘達が執筆した伝記*The Lady Falkland, Her Life*（w. 1645–49）や改宗前後のCaryの手紙，先述のCaryの著書２作品を中心に，Caryの“*life*”を紐解いていく。

まず，Tanfield家の霊廟の話で本章は始まるが，Caryは改宗前に父母と疎遠になり，改宗後にDrury Laneで暮らした。そのため遺体はTanfield霊廟に埋蔵されていない。Elizabeth CaryはTanfield家の唯一の相続人で1602年にプロテスタントのHenry Caryと結婚し，1609年に長女を1610年には長男を出産し，その後も子宝に恵まれる。夫Henryは1622年から1629年までLord Deputy of Irelandに任命され，王代理としてアイルランドを統治した。Henryはアイルランドでカトリック司祭達を迫害するが，1625年に妻Caryは子ども達をつれてイングランドに戻り，翌1626年11月にカトリックに改宗する。1634年に４人の娘がカトリックに改宗し，1636年にCaryはアイルランド生まれの２人の息子PatrickとHenryを誘拐して，ベネディクト修道会の教育を受けさせた。この一件は当時の宮廷ではスキャンダルであった（207）。

その後本書は，Caryが結婚初期に執筆した*The Tragedy of Mariam*の主人公MariamとCaryの共通点へと話を進める。この作品の筋はユダヤのKing Herodとその２番目の妻Mariamの悲劇的な結婚生活である。Herodは自らが王位に就くために王女Mariamの父と兄を殺害した上で彼女と結婚して王位に就いていた。物語はMariamが策略によって不貞の罪を着せられて斬首されるというものである。著者は，Caryを子爵夫人ではなくアイルランド副王夫人（Vice Queen of Ireland）と呼ぶ手紙があり，それが王女Mariamの血筋を想起させると語る（210–11）。しかしこの論には少々難がある。Mariamの場合はその血筋によって夫Herodの王位を正当化させる働きをしたが，Caryの場合は夫が任命されたことによる地位向上のためだからである。とは言えHerodとMariamの人物像や関係性にヘンリー８世とその２番目の妻Anne Boleynとの類似性を認め，CaryとAnne Boleynが姻戚関係だったことを指摘し，そこから宮廷内における修辞技法・話術の重要性を語るなど，著者は先行のMariam論を十分に検証した上でCaryの“*life*”を考察している。

次に本章では改宗前後に執筆された

History of the Life, Reign, and Death of Edward II の分析が行われるが，こちらは少々説明不足の印象を受ける。この作品は，王と寵臣との関係がジェームズ１世とバッキンガム公の関係を想起させ，宮廷内の腐敗や君主の有責性などを語る。本書では，Cary はフランス王の娘であり一般的には悪女とされるエドワードの王妃 Isabel を同情的に描いているとし，改宗後も宮廷とのつながりを持ち続ける Cary の特性を指摘する（217–19）。過去の王室を想起させる *The Tragedy of Mariam* と違い，*Edward II* は同時代の宮廷内を想起させる点でその指摘は的確である。しかし Cary が王妃に同情的な描写をした理由説明が曖昧である。Krontiris が主張するように Isabel は執筆当時の国王チャールズ１世の后でフランス出身のヘンリエッタ・マリアを想起させるが（139），Cary はカトリックの王妃とともにミサに参加している。当時の Cary は改宗したために夫から生活費を絶たれ，子ども達からも引き離されていた。ヘンリエッタ・マリアもカトリックであるがゆえに王から冷遇され，宮廷では孤独な立場にあった（青山 145）。Isabel 像は「（ヘンリエッタ・マリア）王妃への敬愛のみならず，作者自身の心情や信念やカトリック信仰の表象」（青山 151）であり，ヘンリエッタ・マリア王妃と自分自身の経験を基にプロテスタントの夫から受ける「カトリック迫害」を作品に投影した結果だろう。王妃の死で終わる *The Tragedy of Mariam* と違い，王妃が生き延びる *Edward II* は，苦難に屈しない「強き女性」“*mulier fortis*”の姿が込められた作品ではないだろうか。

そして最後に *The Lady Faulkland, Her Life* の分析に移る。改宗後も隠修生活を送らずに宮廷や Drury Lane といった外の世界と関わってきた母 Cary の人生を，一般社会から隔絶された修道院で生活する修道女の娘達が執筆するという点から，本書では娘達と Cary の比較を交えながら Cary の“*life*”を分析する。Cary は文学作品を執筆しているが，その執筆様式については修辞的であり社会とのつながりを反映するとしている。一方娘達の執筆様式は聖人伝であるとしている。しかし散見する削除線が不完全なヒロインを描く困難さを示している（228）。不仲であった夫の最期を看取る姿は司祭であるかのように描くものの，その一方で自分たちの改宗については母の影響ではなく，ベネディクト修道士としての意志力や決断力を強調している，と著者は分析する（238–39）。*Her Life* には Cary について“She spoke very much and earnestly”との記述がある（Wolfe 215）。カトリック信者として困難な道を歩んだ母親を尊敬する一方で，自分達が選択した沈思を重んずる隠修生活を送らず Drury Lane という都会の街で活発に活動する母親は，修道女である娘達の目には不完全な人物に映ったはずである。そ

の葛藤が削除の繰り返しとなって表れたのだろう。*Her Life* はカトリック信者としての Cary に重点が置かれているため，前半生よりもアイルランド滞在以降の後半生が中心に描かれている。また，聖人や殉教者の名が多く登場する一方で，ビジネスの話や異教徒の作家名などは削除されており，宗教的な偏りは否めない。しかし執筆・編集上の苦労の痕跡である削除箇所をも考慮して読むならば，現実から大きくかけ離れた描写ではなくなるだろう。最終的に Cary の子ども達はそのほとんどが内戦の時代に翻弄される運命を辿る。本章を読むと子ども達はむしろ Cary の人生とその“*life*”に翻弄されたようにも思われる。結局，“*life*”の基となるべく自分の意志で選択した人生を歩んだのは母だけだったのかもしれない。本書による *Her Life* 分析は，執筆した子ども達と Cary の“*life*”の対比という Cary 研究に新たな地平を開くだろう。

本書は中世から初期近代４人の女性の記録された人生“*life*”を時代順に追って，カトリック信者としての強き女性“*mulier fortis*”像を私たちに示す。カトリック女性のエリート的宗教生活とされた「隠修生活」“enclosure”を軸に，それを遂行した女性と拒否した女性各々の意志の強さと実行力，さらに現代に続く影響力が語られる。一般に人間形成には周囲の人間だけでなく，生活する地の風土が大きな影響を与える。本書において著者が女性達の“*life*”を考察するためにテキスト（text）に記された人生（life）だけでなく領土（territory）との関係に着目したことは，“*life*”形成の本質を突いている。未だあまり知られていないカトリック女性達が自ら選択して歩んだ人生を記録する“*life*”を考察する本書は，中世から初期近代の女性と宗教の関係を読者に重層的に提示する貴重な一冊である。

引用文献

Krontiris, Tina. “Style and Gender in Elizabeth Cary’s *Edward II*.” *The Renaissance Englishwoman in Print: Counterbalancing the Canon*. Ed. Anne M. Haselkorn and Betty S. Travitsky. Amherst: University of Massachusetts Press, 1990. 137–53.

Lucas, Elona K. “The Enigmatic, Threatening Margery Kempe.” *Downside Review*（1987）: 294–305.

Wolfe, Heather, ed. *Life and Leters: Elizabeth Cary Lady Falkland*. Cambridge: RTM, 2001.

青山誠子．『ルネサンスを書く–イギリスの女たち–』東京，日本図書センター，2000年．

竹山　友子（大阪電気通信大学）